114

北麓遺跡（きたふもと）

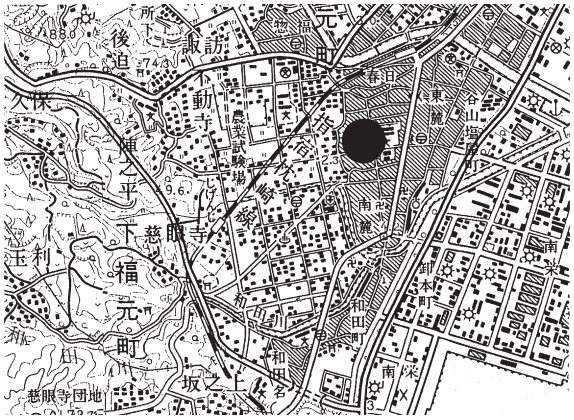
（鹿児島市上福元町4988番地）

位置と環境

遺跡は鹿児島市の南部，谷山市街地のほぼ中央の谷山小学校の西隣り一帯にある。標高約5.5mで沖積平野の中の微高地にあたる部分である。谷山支所学校・住宅地として建物が密集する地域である。かつては麓台地として谷山郷の中心の役所が置かれ，麓集落を形成していた地域である。

調査の経緯

遺跡は昭和35年地主の平田病院院長平田宗治によって発見された。河野治雄によって調査され北麓遺跡として谷山市誌に詳しく記載されている。平成７年にはマンション建設に伴い鹿児島市教育委員会が主体となって発掘調査を実施した。調査面積は，1,100㎡である。

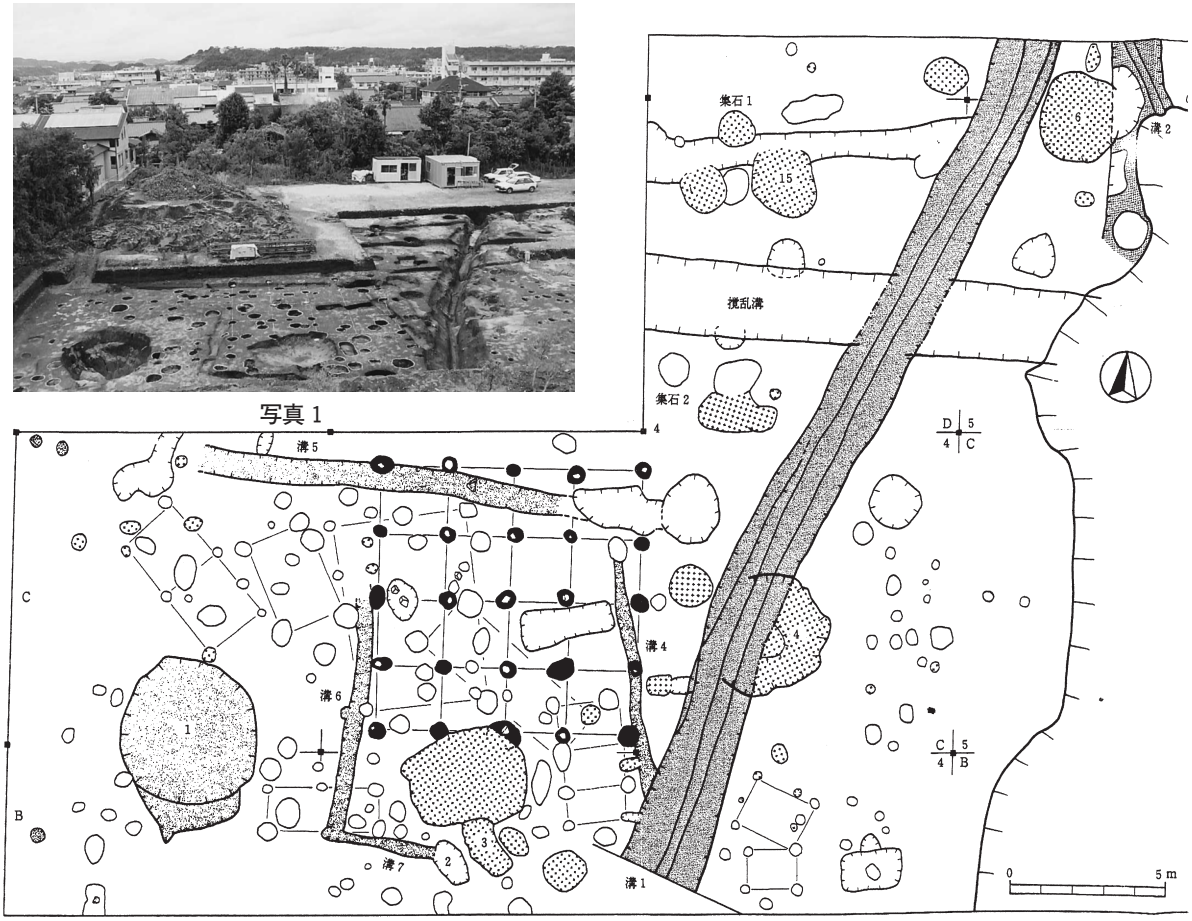


第１図　北麓遺跡の位置

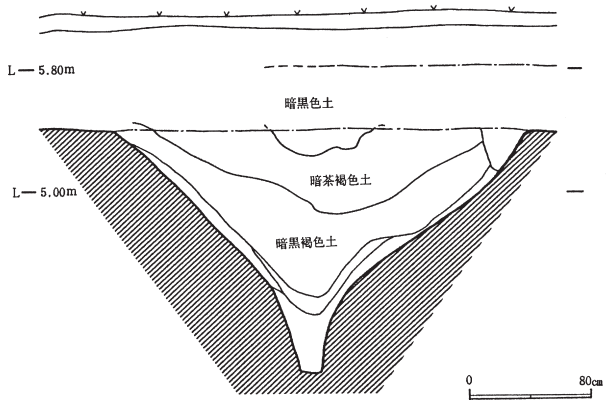
遺構と遺物

調査地の東側は病院の建物基礎によって大きく撹乱されていたが，西側は良好な残存状況であった。地表下60～100cmで基盤の砂層が広がっており，その上位に黒色土の包含層がみられた。

おもな遺構は溝状遺構１，小溝７，大形土壙１，落ち込み６基，集石２基，ピット237基，根石を持



第２図　遺構検出状況全体図と調査地全景（南から）前方の台地は桜ケ丘団地



第３図　溝状遺構　断面実測図

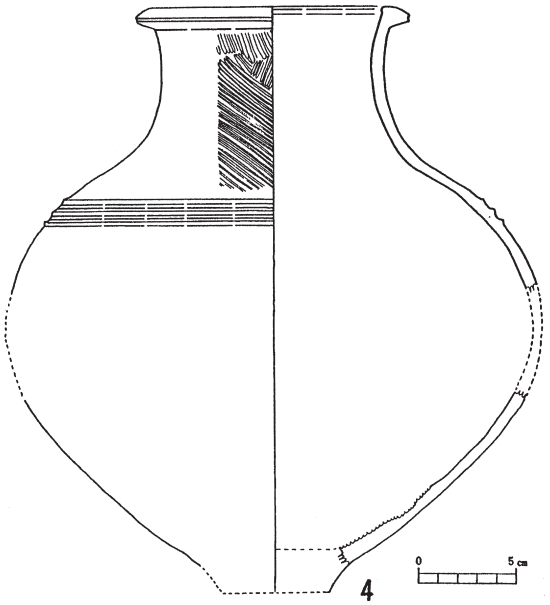
つ掘立柱建物跡１棟などである。

溝状遺構は，幅2.2～2.7m，深さ1.6m，傾斜角60度断面はほぼ逆三角形を呈し，底部は漏斗状に細く狭くなっている。方向はほぼ南北へ延びている。溝内には多量の弥生土器片が包含され，また完形品も数点みられた。型式は弥生中期入来式土器の範疇に入るものである。

根石をもつ掘立柱建物跡は，東西４間長さ8.30m，南北４間長さ8.20mの平面略正方形の建物で，方位はNW５度ほぼ磁北と同じである。周囲に小溝がみられ，伴出する土師器等から13～14世紀の時期である。

土師器は皿・坏ともに糸切底で，内面に指頭や沈線の渦文を残すものである。底面端部が外へ張り出す特徴を有している。

遺物には，これらのほか，青磁・白磁・陶磁器・



第５図　壺形土器

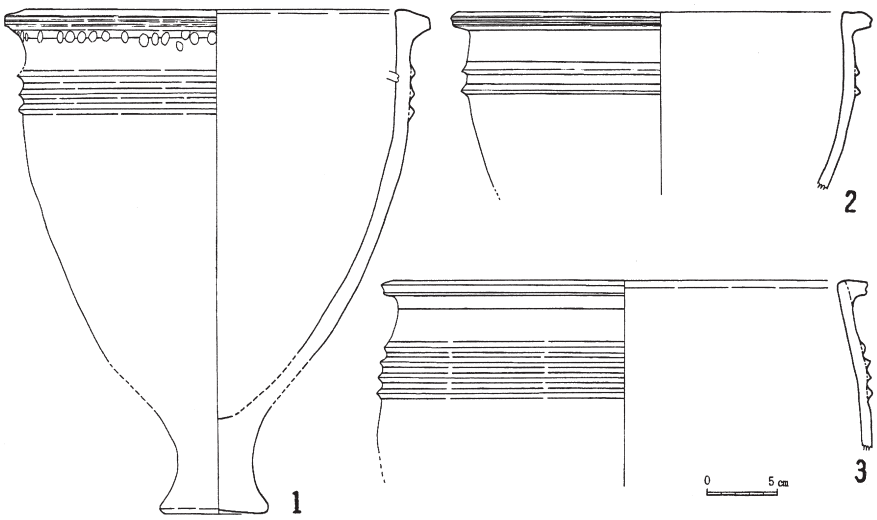
鉄滓砥石・磨製石鏃等が出土した。

特徴

溝状遺構は，この一帯がすでに弥生時代中期において集落を形成していたことを示している。この一帯では成川式土器の発見例も知られているが，今回の調査でも出土しており，弥生時代中期から古墳時代にかけて約500年間，断続的に集落が続いていたことをうかがわせるものであった。

資料の所在

出土した遺物および調査資料は，鹿児島市立ふるさと考古歴史館に保管されている。また，一部は展示公開されている。



第４図　甕形土器（１～３）

参考文献

谷山市（河野治雄）1967「谷山の歴史先史時代」『谷山市誌』

鹿児島市教育委員会1996「北麓遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』21

（出口　浩）